

この試みは本書の価値をより高くしているものと言えるだろう。近年、さまざまな SNS が利用可能になったことで、研究者が社会と相互のつながりを持ちやすい時代となってきた。本書を読んでいると、著者も自身のマンボウ研究を（本書でも紹介されている）SNS を通じて積極的に発信しており、それを通じて講演会や生物関係の展示イベントにも参加している様子もうかがえる。実際、行動観察を共にした市民研究者は著者の関係するイベントの常連であったり、あるいは SNS で得られた情報から著者の学術論文の公表に至った例もあるようだ。研究成果を一般社会に還元することを強く求められる時代において、SNS を積極的に利用している著者の研究スタイルは、個人的には斬新であった。そのような角度から本書を読んでみるのもいいかもしれない。

(甲斐嘉晃 Yoshiaki Kai : 〒 625-0086 京都府舞鶴市長浜 京都大学フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所 e-mail: mebaru@kais.kyoto-u.ac.jp)

義や動向、活用例を紹介した書籍である。以下のように序論と3部9章から構成されており、幅広い分野（もちろん魚類関連のトピックスもあり）での実例が紹介されている。序論：自然史・理工学デジタルアーカイブの今日的意義。第1部 研究データの活用における：第1章 科学データのデジタルアーカイブにおける必須条件「オープンデータ」；第2章 研究データ利活用の国際的動向—世界の自然史・理工学 DA 活用。第2部 自然史・理工学 DA の社会的活用；第3章 オープンサイエンスと天文学—現状と課題；第4章 自然史博物館×デジタルアーカイブ—オープンサイエンスを拓く一例としての魚類写真資料データベース；第5章 自然史情報のデジタルアーカイブと社会的問題への利用—地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) の機能とそのデータの活用；第6章 環境学×教育—森の感性情報アーカイブ・サイバーフォレストを用いた環境教育。第3部 自然史・理工系研究データの学際的利用；第7章 南方熊楠データベース—文理統合・双方向型デジタルアーカイブ；第8章 異分野融合で切り拓く歴史的オーロラ研究—オーロラ 4D プロジェクトの経験から；第9章 東京大学工学史料キュレーション事業の展開—工学・情報理工学図書館を実例に。序論や第4章、第5章では、自然史博物館等における標本データベースや魚類写真資料データベースでの例が紹介され（これらもデジタルアーカイブ）、他章でもデジタルアーカイブを用いた環境教育やオープンデータの考え方、オープンサイエンスの例など、教育や研究に関連する情報が多数含まれている。発想や認識革新の一助になると思われるので、デジタルアーカイブにあまり接してこられなかった方にも手に取って欲しい書籍である。

(中江雅典 Masanori Nakae : 〒 305-005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: nakae@kahaku.go.jp)

魚類学雑誌 67(2):299-299
2020年11月5日発行

デジタルアーカイブ・ベシックス3 自然史・理工系研究データの活用。—井上 透 (監修)・中村 覚 (責任編集)。2020。勉強出版。千代田区。240 pp. ISBN 978-4-585-20283-7. 2,500 円 (税別)。近年に飛躍的な広がりをみせているデジタルアーカイブの世界を俯瞰するシリーズの第3巻 (全5巻予定) であり、自然史・理工系研究に関するデジタルアーカイブの意

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 67(2):299-300
2020年11月5日発行

Tylosurinae および Beloninae に適用する 標準和名の提案

ダツ科 Belonidae について系統分類学的研究を行った Toyama et al. (2020) は、形態データを用いて本科とその近縁群の系統関係関係を推定し、分類体系の再構築を行なった。ダツ科は従来は単系統群とされ、サンマ科 Scomberesocidae とともにサンマ上科 Scomberesocoidae を構成すると考えられてきたが (Nelson et al., 2016 ; Collette and Bemis, 2019), Toyama et al. (2020) は従来のダツ科が非単系統群であり、サンマ科がそこに内包されることで単系統群となることを示した。彼らが提唱した分類体系では、ダツ科に Tylosurinae Starks, 1906 および Beloninae Bonaparte, 1835 の 2

亜科を認め、前者にはハマダツ属 *Ablennes* Jordan and Fordice, 1887, *Potamorhaphis* Günther, 1866, *Pseudotylosurus* Fernández-Yépez, 1948, ダツ属 *Strongylura* van Hasselt, 1824, テンジクダツ属 *Tylosurus* Cocco, 1833 および *Xenentodon* Regan, 1911 の 6 属を、後者には *Belone* Cuvier, 1816, サンマ属 *Cololabis* Gill, 1896, *Elassichthys* Hubbs and Wisner, 1980, *Nanichthys* Hubbs and Wisner, 1980, *Petalichthys* Regan, 1904, ヒメダツ属 *Platybelone* Fowler, 1919 および *Scomberesox* Lacepède, 1803 の 7 属を含めた。南米産の淡水性小型種である *Belonion* Collette, 1966 については亜科の帰属不明とした。

これら 2 亜科はどちらも日本産の属を含むため、日本国内での意思疎通には両亜科を標準和名で呼称するのが簡便かつ実用的である。しかし、これまで両亜科に対して標準和名は提唱されていないため、これらを新たに提唱する必要がある。*Belone* をタイプ属とする Belonidae が「ダツ科」

であるため、同位 (coordination: ICZN, 1999) の Beloninae に「ダツ亜科」を適用するのが順当である。しかし、本亜科には従来の日本産ダツ科魚類全6種のうち、ヒメダツ *Platybelone argalus platyura* (Bennett, 1832) のみが含まれ、ハマダツ *Ablennes hians* (Valenciennes, 1846)、ダツ *Strongylura anastomella* (Valenciennes, 1846)、リュウキュウダツ *Strongylura incisa* (Valenciennes, 1846)、オキザヨリ *Tylosurus crocodilus crocodilus* (Péron and Lesueur, 1821) およびテンジクダツ *Tylosurus acus melanotus* (Bleeker, 1850) の5種は Tylosurinae に含まれるため、標準和名ダツを含む大半の日本産ダツ類を含まない Beloninae を「ダツ亜科」とするのは実情にそぐわず、混乱を招くことが懸念される。したがって、Beloninae ではなく Tylosurinae に「ダツ亜科」を適用する方が実際的と考えられる。一方、Beloninae に適用する標準和名として、本亜科がサンマ *Cololabis saira* (Brevoort, 1856) とヒメダツ *Platybelone argalus platyura* の2種の日本産種を含むことから、「サンマ亜科」あるいは「ヒメダツ亜科」が考えられる。これらの名称を比較すると、従来から「サンマ科」が Scomberesocidae の標準和名として使用されてきたこと (松原, 1955; 吉野, 1984; 藍澤・土居内, 2013)、ヒメダツに比べてサンマの方が広く日本で食材として親しまれ、一般的であることから、Beloninae に用いる名称として「サンマ亜科」が適切であると考えられる。以上より、Tylosurinae に「ダツ亜科」を、および Beloninae に「サンマ亜科」を適用することを提案する。Toyama et al. (2020) が提唱したダツ科の分類体系と、今回新たに提唱する日本産分類群の標準和名は以下の通りである。

- Family Belonidae Bonaparte, 1835 ダツ科
 Subfamily Tylosurinae Starks, 1906 ダツ亜科
 Genus *Ablennes* Jordan and Fordice, 1887 ハマダツ属
 Genus *Potamorhaphis* Günther, 1866
 Genus *Pseudotylosurus* Fernández-Yépez, 1948
 Genus *Strongylura* van Hasselt, 1824 ダツ属
 Genus *Tylosurus* Cocco, 1833 テンジクダツ属
 Genus *Xenentodon* Regan, 1911
 Subfamily Beloninae Bonaparte, 1835 サンマ亜科
 Genus *Belone* Cuvier, 1816
 Genus *Cololabis* Gill, 1896 サンマ属
 Genus *Elassichthys* Hubbs and Wisner, 1980
 Genus *Nanichthys* Hubbs and Wisner, 1980
 Genus *Petalichthys* Regan, 1904
 Genus *Platybelone* Fowler, 1919 ヒメダツ属
 Genus *Scomberesox* Lacepède, 1803
 Incertae sedis in Belonidae 亜科帰属不明
 Genus *Belonion* Collette, 1966

引用文献

- 藍澤正宏・土居内龍. 2013. サンマ科. Scomberesocidae. 中坊徹次 (編), pp. 667, 1933. 日本産魚類検索 全種の同定 第3版.

東海大学出版会, 秦野.

- Collette, B. B. and K. E. Bemis. 2019. Order Beloniformes. Pages 1–4 in B. B. Collette, K. E. Bemis, N. V. Parin and I. B. Shakhovskoy, eds. Fishes of the western North Atlantic. Order Beloniformes. Needlefishes, sauries, halfbeaks, and flyingfishes. Mem. Sears Found. Mar. Res., Mem. 1 (pt 10).
- ICZN (International Commission on Zoological Nomenclature). 1999. International code of zoological nomenclature, 4th edition. The International Trust for Zoological Nomenclature, London. xxix + 306 pp.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索 I–III. 石崎書店, 東京. xi + v + 1605 pp., 135 pls.
- Nelson, J. S., T. C. Grande and M. V. H. Wilson. 2016. Fishes of the world. 5th edition. John Wiley & Sons, Hoboken. xli + 707 pp.
- Toyama, T., T. Kawai and H. Imamura. 2020. Phylogenetic systematics of the needlefishes (Beloniformes: Belonidae). The Thailand Nat. Hist. Mus. J., Monograph 1, 1–73.
- 吉野哲夫. 1984. サンマ科. 益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌 (編), p. 78. 日本産魚類大図鑑. 解説. 東海大学出版会, 東京.

(外山太一郎 Taichiro Toyama: 〒311-3512 茨城県行方市玉造甲 1560 茨城県水産試験場内水面支場 e-mail: t_needlefish@frontier.hokudai.ac.jp; 今村 央 Hisashi Imamura・河合俊郎 Toshio Kawai: 〒041-8611 北海道函館市港町 3-1-1 北海道大学大学院水産科学研究院海洋生物学分野)

魚類学雑誌 67(2):300-308
 2020年11月5日発行

インタビュー

先達に聞く

話し手: 多紀保彦 (東京水産大学名誉教授)

聞き手: 林 公義, 岡部 久

2018年2月17日取材

はじめに

多紀保彦先生は1931年東京都の平井 (現: 江戸川区平井) でお生まれになりました。1954年に東京水産大学 (現・東京海洋大学) 増殖学科を卒業され、1977年に東京農業大学より農学博士を授与されました。学位論文のタイトルは「An analytical study of the fish fauna of the Mekong river as a biological production system in nature」で、淡水魚類のフィールド調査によって魚類相とその地域の地史との関連性を考究する生物地理学的なアプローチを得意とされ、その研究手法を生涯のテーマとされました。主な研究フィールドは1964年のマダガスカルに始まり、東南アジア、アフリカ、中南米と広く海外が多く、特に東南アジアの漁業開発における国際的なプロジェクトで

は、淡水魚類の養殖技術の指導は元より、国際会議の開催にも貢献され、これらの功績により1994年には国の政府開発援助実施機関(ODA)より国際協力事業団(現・国際協力機構:JICA)国際協力功労者表彰を受けられました。また1977年に東京水産大学の助教授として着任され、1995年に同大学教授として退官されるまで、数多くの学生を指導され、魚類学、水産学の様々な分野で活躍する人材を世に送り出されました。そして日本魚類学会では、1977年から1992年に編集幹事(1980-1982年、1991-1992年には主任編集幹事)を、1980年から1992年には評議員をそれぞれ務められました。

なお、インタビューは数時間に及びましたが、紙面の都合上、すべてを紹介することができません。一部割愛、編集をさせていただいたことをお断りします。

生い立ちから魚類学を志すまで

林: まずは先生の生年月日や生い立ちをお聞かせください。

多紀: はい、「先達」のマニュアル的な話になりますな。昭和6(1931)年8月20日生まれです。歴史を遡るとね、わが家はずっと江戸住まいでして、祖先は中国から丹波の国(現:兵庫県)の山奥にある多紀郡に移住してきたわけで、ご先祖は帰化人なんです。先代が徳川家の侍医なんかしていたものだからよく江戸城のほうに呼ばれていたようで、私のひい爺さんの前ごろにはもう東京の平井、今の江戸川区にいたんです。親父からあとの年上の姉も無理に東京女子医専に行かされたりして、女でも強制的に医者にさせられたみたいだね。兄弟は6人で僕は末っ子です。いかにも末っ子らしいでしょ。私と12以上違う長男は不良学生でね、日大の文科系なんか行って。普通長男というのはもう少し責任感があるよね。で、親父が校医をやっていたので新入児童の身体検査は親父にやってもらったけれど、僕が小学校1年のときに親父は亡くなりました。親父とお袋が話していて「甲乙丙(身体検査の結果)の中で彼奴は普通だったら丙にするところだが、かわいそうだから乙にしておく」と言っていたのを隠れて聞いたことがあるな。そんなひ弱な子どもだったけれど、いわゆる冒険みたいな知らないところをほっつき回るのは大好きだったし、泳ぎでかなり体力をつけたような印象があるね。僕は今でも覚えているのは、親父が開業した多紀医院の石でできた高い2本の門柱のてっぺんまで登って、そこにあぐらをかいて座るのが好きだった。これはまさに余談だけれど、外見では体が小さくて痩せているし、ひ弱な感じだけれど、そういうようなことは割と得意でサルみたいだったね。その門柱には多紀医院、内科、小児科、花柳病科と書かれた大きな看板があって、お袋に「花柳病ってなに」って聞いたら、お尻の病気だよって言われてね、それで僕は持かなんかだと思っていた。あの頃は親がなかなか正確には教えてくれないから。それで平井は産業地帯なので旦那衆がやっぱり大勢の女衆を集めて遊んでいたわけですよ。だ

から親父はそういう花柳界で遊ぶお客たちを診ていたことが後になってわかるんだな。それで戦争が終わってから僕は久しぶりに懐かしい平井に行って、そのころの産業地帯でいろいろ聞いてみたんです。そしたら、あんたは多紀先生の息子のどっちなんだとか言われたりしてね。要するに皆はその多紀先生という医者のお父のことをよく知っていてね、だから俺もそういう身分にならなければと思ったけど駄目でしたね。

林: 先生の頃だと尋常小学校や旧制中学校ですよ。それと兵隊経験はあったんでしょうか。

多紀: はい、尋常小学校でしたが途中から国民学校になったんです。江戸川区の小松川第三小学校かな。そのあとは旧制中学校で府立三中という、いまでいうと両国高校ですか。それでその頃はまだ空襲があったりしてね。兵隊経験はありません。軍事教練まででした。軍事教練は学校の中庭で主にほふく前進のみでしたね。ずっと男女共学なんですけど、生徒数が増えて1から5組まであって、1から3組は男組、4組が女組で、もう一つが男女組ということですね。男女組になってみたかったけど、そういうチャンスはなかったな。子どものころから生き物は好きだったけど動物より植物に興味を持っていたんで、よく親戚やお袋なんかからは「おじいさん」って言われていたよ。盆栽みたいなものを育てるのが好きだった。それがいつ頃からそうなったんだろうね。兄弟の中



写真1. 「魚の会」講演会で「わが青春のメコン河」を熱く語られる多紀保彦博士(撮影:林 公義, 横須賀市自然・人文博物館にて; 2007年11月11日撮影)。

ではその点が異色の存在だったんですね、やっぱり。もう少しパーソナルヒストリーを話さなければいけないかな。戦争中にね、府立三中からどうしても地方に疎開しなければいけなくなった。ところが多紀一族というのは東京にしか姻戚がないんですよ。どこに行ってもいない。両親は私の兄貴が“天ぶら兄貴”だったんで強制的に一つ上の姉を医者にしたわけさ。東京女子医専という四谷の河原町かなんかにあったのかな。そしたら医事新報っていう医学界の新聞に求人広告がよく出ていて、甲府の共済病院で眼科の募集があったわけ。そこで姉は眼科やっていたんでそこへ移る予定でいたわけ。そこで姉より先に疎開することになって荷物をまとめ、力仕事をやっていた知り合いのおっさんが全部荷造りをしてくれてね、貨車を1台借りてきて甲府までいってくれたんだな。それで今みたいにメールなんか無いから手紙で姉に連絡をとりながら、府立三中の1年生のときに着の身着のまま地図をもって疎開先の家へ訪ねて行ったんです。家主には中学1年の私が先に来ましたが、1ヶ月後に家族も来ますのでどうもすみません、よろしくなんて言ったかな。その頃は府立三中なんかも生徒が少なくなっていたんだな。要するにね、そういうわけだから僕1人で農家の家の半分を借りて、しばらくはそこで飯食わしてもらっていたの。しばらく疎開先の学校に通っていたんだけど、しばらくして3月10日の東京大空襲をビリケンラジオで聞いてね、そしたら家族や2人の姉なんかはモンペ穿いて、下駄と草履をちんばに履いてね、もうほうほうの体でやってきてね。もうその頃は東京の平井の家は空襲でだめだったけれど、で、その頃の疎開先の甲府はよかったですね。土地は広いし、庭の半分は荒地みたいなのところだったけど、いろんなトンボがとれるし、となりの家の果物のイチジクなんかをね、竹竿の上を二つに割って、そこにストッパーを付けて、紐を引っ張るとストッパーが外れて「パチン」って捕れるという仕掛けをつくったりして、疎開していても楽しかったな。その頃からそういう才能はね、どんどん伸びてきてさ。

岡部：先生の子供の頃の遊びや趣味はなんでしたか。

多紀：そうだな“遊び”といってもね、近くは荒川放水路のある荒川沿いですから、小岩、新小岩から市川、船橋と、あの辺が私のフィールドだったんですな。だけどガキの頃はそれでなにをするというわけでもなく、ただウォーキングをしていましたね。ウォーキングといってもなんとなしの歩きだけ。で、そのうちに戦争がはじまるとウォーキングの帰りにその辺のサツマイモやジャガイモのを買って担いで家に帰るとというのが日常で。戦時中はね、そんな状況でしたね。だけど考えてみるとね、大人になってからもいわゆる“なんでも要領よくやる”ようになって、今でも同じようなことをやっていますな。おかげでコンサルタント会社に雇われては東南アジアだとか世界中を回って、ついでに魚類の調査とか研究をしてきたりでね。その代わりに報酬はジャガイモやサツマイモが買えるくらいでしたな。趣味は僕の場合はね別に

魚が好きじゃなくてもなんでもなかった。でも今でも思いつくのは、釣りににはよく行きましたね。これはまったく余談ですが、みなさんご存じないだろうけれど戦時中に『海軍』なんて映画があってね、高飛びこみで海へ飛びこむ場面でそのスタンドインをやった水泳の有名な選手がいて、その人なんか荒川放水路の水田場の番長みたいなのをやっていた人なわけ。そこでガキの頃はそこによく通って、荒川放水路の茶色い水を口から入れたり出したりしながらその水泳選手を真似ていました。泳ぎはもう得意でした。だから本当にその頃は他にすることないから、唯一といたら探検みたいなのが好きでね。

岡部：探検というのはどういうことですか。

多紀：最初からこんなことばかり話していいんですかね。要するに子どもの頃の愛読書は「ロビンソン漂流記」とかでしたから。話はロビンソン・クルーソーが漂流して島で独自の自活を始めて。そのうちに黒人を一人助けて、金曜日だったのでフライデーという名前をつけて。なんということでもないが、ロビンソンが偉いと思うのは、「金曜日」にこだわったという点で、無人島であっても今日は何月何日何曜日というのを何かに付けていたんだな。それでフライデーなんですよ。で、私も自分で荒川放水路を渡って新小岩、小岩、市川、船橋って頭に記憶しながら歩くわけさ。へたすると千葉位までは頭に入れながら、小学校の頃だったな。それでロビンソン・クルーソーが幻の人だったから、これが僕の探検心の始まりなんだな。だから小学校の教科ではね、そう体育が得意だったかな。当時は戦争中ですからね、学校ではやはり教練とかがあってそういうのも成績が良かったですよ。ほふく前進なんていうのはね。小学校だからそんなに細かい教科はなかったけれども、いわゆる理科みたいなものはまあ普通にやって良い成績をとればいだろうという感じでね。体育が得意だったというのは、運動能力は高かったということかな。それもロビンソン・クルーソーの生き方の模倣に通じる影響でしょうな。

林：子どもの頃に偉人の伝記を読んで、感動してアフリカ探検に憧れるとか、主人公が自分の目標の人になる場合がありますね。先生を研究の道へと導いたきっかけは何ですか。

多紀：うちも要するに先祖代々が医者なもんで、それで野口英世なんか結構憧れたわけだけでも。先祖が徳川家で侍医役みたいなことをしていたので親父も医者になったし、江戸川区の亀戸や平井の辺りは無医村なんでそっちに行かされたわけなんだな。平井というところは当時はもうだだっ広いところで、ガマが生い茂っていて、タダみたいな場所だったな。そんなところだから狩り（ハンティング）をやったりしていたガキでね。それで休みのときは荒川放水路を渡って市川、千葉のほうへ遠征したものでしたね。ロビンソン・クルーソーに憧れた僕が今は年とったけれど、ちゃんと学校出て一応魚類学を勉強してさ、その魚類学を基にして海外へ行って魚の分布とか、メコン川の上流と下流ではどれだけ魚類相が違う

かとか、その魚類相はどこが一番近いかなどという関係に興味をもったわけ。で、僕の研究の方向性について一番影響が大きかったのがね、近藤典生という面白い先生を知ったことなんだな。

学生時代

岡部：府立三中を卒業されてから、当時の水産講習所に進学されたんでしょうか。

多紀：そう、水産講習所ですが僕の時はもう水産大学になっていた。あのね、面白いのは僕が高校卒業して新制高校受けるときで、昔は越中島にあった水産講習所ですね。あそこは海軍の海兵の予備校みたいなもので、東京水産大学は1年生が大学生で、上級生は水産講習所生だったんですよ。それでその頃はもう戦争が終わって、新しく自衛組織ができあがって、そういう自衛隊の施設にほうぼう取られたんだよね。で、昔の講習所や新しい水産大学なんかの校舎はみんな自衛隊の本部になって、我々の寮は大きかったので、3階の寮の窓から見ると隊員が鉄砲で担い撃ちしていたり、校庭の中を分列行進で訓練しているのが見えるわけ。疎開していた甲府の中学の同級生なんかは職がないものだから警察予備隊に入って、そこの兵隊として集まってきましたね。それから後に久里浜（横須賀市）に移ってきたのが大学としてはよかったなと思いますよ。

林：今は海洋大学ですが、東京水産大学の歴史や学校生活、当時の先生方の話を聞かせていただけますか。

多紀：僕は東京水産大学の2回生でして、大学という組織が動き始めてからそんなにまだ時間がたっていない頃でした。“水産”といってもいわゆる実習所みたいなもので、実験実習所というようなものであって、だけど実験なんかはたいしてやっていなかったけど。実習所をいくつかもっていて、その一つが館山（千葉県）で。館山は別に生物学的な実習所じゃなく海洋学でカッターの練習をしたり、山梨県の八ヶ岳に近い大泉実習所は鮭鱒（けいそん）類の養殖実験なんかをやっていたわけですね。あと東海道の浜名湖近くの吉田実習所（静岡県）ではウナギや金魚、コイも実習材料でした。吉田実習所にはお盆の頃行くと盆踊りを地元の人たちがやっていますね。学校で授業をやりつつこれら実習所には時々通っていたわけです。確かに大泉なんていうのはなかなか良い自然環境のところでしたよね。僕が学生だった頃の学科は漁業、製造、増殖の3学科で、一学科に学生は50人位だったから、全体で150人位でした。僕は増殖の2回生で、増殖の授業は淡水魚が稲葉（傳三郎）さんで、海水魚が一番年寄りで痩せぎすの堀（重蔵）さんだったかな。で、残念ながらしっかりと魚類学というのはなかったんですよ。まだ水産大学の増殖棟と製造棟の間にあった2階建ての建物の資源研究所、ちゃんとした研究所ではないんだけど、そこで仕事をしていた時に稲葉先生が入って来たんです。先生の専門は淡水養殖だけなんで、つまり淡水魚の稚魚にミジンコをいっぱい与え

て、何日経つとどの程度成長するかという養殖のテクノロジーが専門なんです。ところが僕が専門にしているのは淡水魚でも“新種がどうのこうの”ということなもので稲葉先生とは話の共通点がないわけさ。それで資源研にいる時に先生はいつも僕を見るなり「ああ、君、多紀君か、君じゃあ駄目だ」ということになるんだ。このことを今でも思いだすとね、独り住まいの爺さんが“うふっ”なんて思い出し笑いしたりして、自分でも気持ち悪いわな。

林：先生の卒業論文について教えていただけますか。

多紀：僕は小さい頃から普通の理科だのそういう分野はやる気がなくて、特に「生物学」を勉強しようとかいうのではなく、いわゆるロマンチズムなんです。本当にだからいい加減なものが好きで、魚とかをフィールドで調べるような生物学をやりたいなと漠然と思っていただけで、それが水産大学に入学してから生物地理学に興味をもったもので最終的には東南アジアの国々やマダガスカルに行ったりするようになったわけ。で、本当は魚なんかそんなに好きじゃなかったんだけどね。僕の卒業論文は何だったかな。うん、生物地理だけね、ボティア（*Botia*）というドジョウの仲間の系統分類みたいな研究をやったのかな。うん、それで結構良い評価をもらってね、その頃の指導教官は卒論では本当に直接手とり足とり見てくれてね。いま名前を思い出せないんですがその頃は先生がたくさんいたのかな。それで独学だけでなく海外に出るといわれて結構ヨーロッパなんかに行ったりしてね。最初はバナレスク（P. Banareescu）や彼の弟子でナルバント（T. T. Nalbant）なんかに会ったりして、東南アジアのドジョウのグループの形態をやっていた研究者でね。僕はアユモドキの属の分類だけじゃなく、系統的に観ないといけなかったし、まあ今ならDNAなんでしょうね。それで僕はそのアユモドキの仲間をいろいろと亜属に分けたんです。その後になってバナレスクとナルバントがその一つの属（アユモドキ属）にヤスヒコタキア（*Yasuhikotakia*）という属名を与えてくれてね。それだけが唯一の自慢だな。東南アジアにはいない種類だけれども、それでまず僕のネームを使ってくれてありがとうという返事をすぐに出してね。

岡部：先生と同期の大学2回生の中に、後年になって水産大学や試験場で仕事をされた先生方が多くおられますね。

多紀：そうね、同期では安田（富士郎）、奥谷（喬司）や野中（忠）さんなどですかね。福島水試の場長や、福島で水産をやられた秋元（義正）さんや神奈川県水試にはマグロの中込（淳）さんもいましたね。

岡部：このような先生方を輩出したクラスはどんな雰囲気だったのでしょうか。

多紀：授業の時は真面目に聞くことはなかったしね。あの先生の名前はなんと言ったかな、奥谷君がすぐに物まねしていたんだ。それから病理学の先生で仇名は「ポッケン」、魚の顎の部分が発達しないポッケンクラン

クハイトという「あごなし病」の話をよくしていた。この先生の本名（保科利一）がいま出てこないな。同級生同士でどこかへ採集や調査に行くという連携はあまりなくてね。みんなでワァーと一緒に行くのは飲み屋だけだね。水産大学は「海鷹祭」という大学祭があったんだよね。今でも名誉教授の多紀保彦様って連絡がくるんだけど、出かけないな。校舎が品川に移ってからは、自分が学生時代に品川に通ってないので思い出がないな。横須賀市の久里浜にいた頃（水産講習所時代）のほうはまだ動乱時期だったので面白かったね。平作川の堤沿いに立派な校舎があって、跡地はすぐに自衛隊駐屯地になったんですが、次いでアメリカ軍が入ってきたわけ。それで学生は校舎を返せというデモをずいぶん錦糸町辺りや品川の水産講習所のそばで当時やったんですね。私の学生時代はすべて横須賀市の久里浜で過ごしたので、卒業までそんな感じでした。

大学卒業後の近藤典正先生との出会い

林：卒業されてから最初に就いた仕事は何ですか。

多紀：まず大学にいた稲葉（傳三郎）先生に紹介された、大森（東京都大田区）にあった熱帯魚屋でしたね。その熱帯魚屋は石川貞二さんという当時（1957年頃）「熱帯魚の正しい飼い方」や「熱帯魚飼い方増やし方」という本を書いた人で、息子さんと一緒に店やっていたわけ。石川さんの出した本や図鑑は元外交官をしていた橋爪政之氏（フリスコ熱帯魚研究所所長）の20年以上にわたる研究をもとにして、自分の飼育経験と外国の文献を加えたものでね。当時橋爪さんは喫茶店も開いていて、昭和30年頃は熱帯魚を飼うのが流行で、一種の文化人の趣味という感覚があったんですね。大森にあった店は温室や水槽なんか揃っていて、大した商売ではないのだけれど数が少なくなりそうな魚のケアなんかしていました。稲葉先生が石川君のところに行けというので大学の卒業と同時に勤めたわけですが、そしたらほかにも熱帯魚屋をやりたいという金持ちの実業家なんかいて、そこにも行ったけど結局はすぐに辞めちゃってね。でそのあとは東京農大育種学研究所の近藤（典正）先生のところまで研究員になって、結局は“海外屋”になっちゃった。同期の安田君の家は金持ちだったから、たしか東大の農学部の方へね。

林：魚類研究者としての出発地点となるわけですね。

多紀：大学（東京水産大学）を出てから暫くして、近藤先生が「お前、来いよ」って言うので東京農大育種学研究所の研究員になった。それでしばらくは研究所に通ってね、しばらくして先生に「俺の顔も立ててくれなきゃ俺いやだよ」って言ったら主任研究員にしてくれて、それで一緒に隊員となって連れて行ってくれたのが東京農大のマダガスカル調査隊なんですよ。

岡部：先生の最初の外地研究先はマダガスカルでしたか。

多紀：近藤先生という人はなかなか商才があるんで、

読売新聞とかいろんなところをスポンサーにして自分は自費を切らないでその費用を使って行くわけ。そこで私の最初の外地がマダガスカルですよ。そりゃ僕なんかはマダガスカルのことなんか分からない小僧だったけど、生物学を勉強した人ならば普通もう説明するまでもなくこれはすごいところですよ。アフリカの対岸にありながら東南アジア系のエレメントもありながらアジア系のファウナがないんですよ。行ってみてそこですっかり虜になってね。それでまた僕は語学が好きだったからフランス語がかっこいいんですよ、あのマダガスカルでね。マダガスカルはフランス語圏なんで、なかなかの美人もいるし、それでフランス語がうまい女の子を先生にしてね。タクシーに乗って宿舎のある研究所に行く途中で、ア・ゴーシュ（左へ曲がれ）とかア・ドウロワ（右に曲がれ）とか言いながら間違えるとノン・ア・ガッシュ、ノン・ア・ゴーシュって、楽しかったな。要するに僕は変な会話を、言い換えなくてもすぐに覚えて話そうとする能力はあるんですよ。そうすると僕が一番年下なんだけど近藤先生が「お前マネージャーをやれ」っていわれてね。マネージャーで一番いいのは近藤先生の研究費をもって銀行に行き、僕のサインがないと引き出せないようにしておいたんです。そうすると銀行での近藤先生と僕の立場がだんだん違ってね、最後は「多紀君、ちょっと都合してくれないか」なんて言われたこともあったけどね。

林：マダガスカルでの初仕事は魚類調査を担当されたのですか。

多紀：そうね、魚類担当でした。マダガスカルでもアフリカにいるティラピアの仲間が沢山いるわけで、そういうのが面白くてマダガスカルの魚類相を調べるとアフリカ系のティラピアを移植したとか、メダカの仲間を移植したというような話があったりね。調査が面白くなって、生物地理学や大陸移動説と関連する研究ばかりしていたな。海外でする研究や調査が面白くなってね、それで“海外屋”になっちゃった。教え子の森岡（伸介）君がね、マダガスカルのマジュンガに長くいたんだけど、やっぱり彼もフランス語圏に溺れちゃったほうなんだよな。

岡部：その当時、コモロ諸島のシーラカンスは話題になっていましたか。

多紀：はい、もちろんコモロのシーラカンスは有名で、2回目か3回目か海岸の町へ行った時に海から上がったシーラカンスがありましたよ。でシーラカンスはなんでそこに沢山いるのかという疑問が湧いてね。しかし海の魚の分布とか地理というのはなかなか難しいですね。だけどそれが面白くて魚の生物分布、生物地理をやりながらいろんな国や島へ行くのを建前にしていたような。研究の世界もいろいろだね。マダガスカルのシーラカンスは他の調査という名目をつけて、一人で研究所の予算使って行ったりしてね。昔の罪をここで活字にはしないでください。まあいいか。

ベトナム、ラオス、タイ、中国での調査の思い出

岡部：マダガスカル以外の海外研究はどうだったのでしょうか。

多紀：そうですね。マダガスカル以外の海外にも行ったけど、近藤先生との関係がない時にも今でいうコンサルタント会社みたいところに務めてからはいろいろと出かけましたね。一番最初がマダガスカルで、帰ってきてから農大の近藤さんの研究所に戻って、あとはコンサルタント会社に時々という感じだったかな。そんな時に、誰か海外調査に行く魚の専門家がいないかということで、それじゃ俺行くよって手上げたわけ。最初に行ったのがどこだったかな、東南アジアのラオスだったかな。それがとても良かったわけで、当たりだったね。ベトナムもアメリカの調査会社との関係ができて行きました。そのあとも JICA の仕事でベトナムのカントー大学のほうに行かされて、当時日大にいた川本（信之）先生らと一緒に仕事をしましてね。川本先生が偉いのはね、生理学者だから魚の分類学については全然知らないんだよね。けれども一生懸命採った魚をスケッチされて、あとでちゃんと標本を作って、そのスケッチをまとめた図鑑みたいな本も出版されていましたね。君はもっていますか。

林：はい、先生も淡水魚の生物地理に関する「東南アジアの魚の本」を出版されましたね。

多紀：そうね、元データというのは、やっぱり近藤先生の研究所にいた頃から東南アジアに行って集めたもので、コンサルタントの仕事でお金もらいながら、弟子に仕事としての調査に行かせて、その結果として標本を集めたりしていたわけで、魚の標本は自分でも集めたけどね。だから「人のフンドシで相撲をとった」ということかな。標本はね、まずは川本先生に相談してから農大の研究所に置いたのかな。

林：調査中で先生が一番思い出になるような、すごく印象のこっている話はありませんか。

多紀：それはね、一つはベトナム。いまでいう南ベトナムに JICA の専門家として行った。その以前にあの辺には川本先生も行っていたんだけどね。俺の行った頃は当時あれで、5、6人の日本人の専門家がいて、魚類は僕だけであと植物の人で、ほとんどが JICA 関係の人でね。その研究所のスタッフはほとんどが日本人の専門家だったんです。そういうところだから、みんな女房ないしは子どもまで連れて赴任した人たちがいっぱいね。それでベトナム戦争中でハノイがやられる頃でしたな。それで僕はもう結婚していて女房は日本にいたんですよ。カントー大学というのはメコン・デルタの一番端っこにあって、日本大使館や JICA などはサイゴンにあるので、専門家とその家族、俺なんか一人だけど月に一遍はサイゴンにいった JICA の事務所に行くわけ。そして当時は戦争中だからパテト・ラオ（ラオス愛国党）やベトナムがやって来て、ハノイなんかはもうみんなベトナムに占領されていたんです。そこで“これからどうするか”を聞きに行こうということで、皆で家族も連れてサイゴン

の JICA の事務所へ行ったんです。そうしたら、「なにを悠長なこと言っているのか、できれば直ぐにでも帰国しなさい」って言われて、それで僕なんかは一人なので自分の車を誰かに適当に売って、すぐ帰りなさいと。そこでもう皆はカントーに帰らずそのまま日本に帰国したことがありましたね。だから今でもベトナム方面に行くときには、東京から発ってアフリカ大陸のほうへ飛行機が向かうときにね、昔の遺跡に壁画があったり、それを越すとメコン川が見えてきたり、するともうカントーの町がこの空の先だなんてね。そんなのが懐かしくて、その頃のことや、当時の友達や仕事仲間のことを雑誌に連載したりしましたよ。

林：その頃の JICA っていうのはかなり大きなプロジェクトを企画していたのですか。

多紀：うん。結構ありましたよ。それで要するにプロジェクトには開発プロジェクトもあるし、例えば僕が行ったカントーの場合は、カントー大学への日本から派遣する先生団の一員としてきてくれということで、僕は生物学の担当として授業や研究もやるわけ。僕なんか女子の助手を連れて、一年中採集と称してどっかを歩き回っていたな。でみんなと一緒に急いで帰国したあとにカントー大学から変な電報が来て、これからも何とかしてくれって言うわけ。だけど JICA とのいろんな事情でそのあとは駄目だったけれど、あの頃はまだ戒厳令ではないけれど“気をつけろ”と言われていたからね。でもカントーにいた頃はいろいろ面白かったな。僕は後でいろんな話を雑誌に連載して、当時のことをずいぶん書いたな。こんな話もあってね。ある日、家のメイドと近所のメイドがおろおろしながらベトナム語で「大変だ、大変だ」って騒いでいるわけ。なんだと思ったらベトナムに上陸した銀輪部隊（自転車部隊）のことで、一分隊が自転車ですってカントーからメコン・デルタの一番先のほうまで行くという事らしいと。で、兵隊が自転車でカントーにきたぞというのでメイドたちがみんな怖がって家のドアを全部閉めているわけさ。僕が開けなさいと言うと、メイドが「やめてくれ、やめてくれ」って頼むんだけど、開けさせてみると美男子の銀輪部隊の将校なんだ。家から後ろにも兵隊が皆自転車でまたがって並んでいるわけさ。それで何かと思ったら、「皆、喉が渇いてどうしようもないので水を飲ましてくれないか」ということだったんだな。飲み水は割ときれいな水が通っていたからね、そこでメイドに言って水をコップに入れ、部隊長に飲んでもらったら「非常にうまいんで、ついては私の部下にもみんな1杯ずつ飲ませてやってくれないか」と言われてね。それで僕はメイドや他の人やなんかに、英語とベトナム語でもって説明したんだけど、彼女たちは最初怯えていたけれど部隊の兵隊みんなにやってくれて、それで非常においしい水だったと大変丁寧なお礼を言われたあとにカントーを通過していったな。あれはなかなかの軍人たちで、いわゆる本当の軍人ではなく、当時は大学生にそういう召集令状が来たのが結構いたんだよね。

学徒出陣じゃなくても、そういう兵隊が1, 2年たつとしっかりした士官になって、しかもフランス語も話すし、銀輪部隊ってなかなかのものだったんだよね。

岡部：戦争が終わってもベトナムには残っておられたのですか。

多紀：まだ北ベトナムとは、特にハノイのほうは戦争していましたね。あの頃の将校はすごかったな。その頃は結構いろいろあったようでね、本や映画になった「ビルマの堅琴」なんていうシーンが割合に思い出されるわけさ。だから「殖生の宿」なんかをみんなで合唱したりしたこともあったな。僕は好きでベトナムに行き、JICAからお給料がもらえるし、それからいろんな雑誌に連載で毎月1回は文章なんて書いていたから、海外は僕にとっては非常によかったです。それで副産物としては魚の標本やなんかをね。

林：調査や採集にはどなたか同行されるのでしょうか。

多紀：1人は助手みたいな現地の若い男性を連れていくこともある。それとガイド船みたいなものを借りなきゃいけないから。ドライバーを兼ねた通訳的なこともできるし、で、トイレ行くときのために葦簀のようなものを持って行ったり、場合によっては葦簀を水に浮かべて使ったりでそんなことが結構あった。そして現地にながらそんな事を日本の雑誌に記事として書いたりすれば小遣い銭が稼げるわけ。『フィッシュ・マガジン』とか『アクアライフ』とかにはずいぶん書いたな。

岡部：東南アジアにはいくつもの国があって、いくつもの言語があるわけですが、先生の語学センスを持ってすればどこでも問題ないわけですね。

多紀：僕は、いや、すべてはやっぱり駄目で、長くいた国だけですよ。だからその中でも一番長くいたのはラオスですよ。それで今勤めている長尾自然環境財団の事務局長と一緒にJICA関係の仕事でラオスに2回行ったんです。ラオスにある水産局かどこかの建物の2, 3階にあるベランダから挨拶をしろと急に言われてね。みると住民がいっぱいいるわけ。で、最初に「シ・パ・ピー、ティ・ダイ・ハオ」って言って、これは要するに「シ・パ・ピー」が15年だから「この町を出てから15年たっている」というような意味の挨拶をして、あとは途中でラオス語で1曲歌って、そのあとに英語でその通訳をしたの。僕がいた頃はこの歌が流行っていて猫もしゃくしも「国を出てからもう15年」と、望郷の歌っていうやつですよ。その時はみんな喜んでくれてね。その時はちょっとした調査だから4, 5日してラオスに帰ると、またそこで挨拶しろと言うわけさ。で、「有難う、もう帰るよ」って言ったら皆が「ちょっと待て、待て」ということで。そうしたら聴衆やラオス人の村人がみんな「シ・パ・ピー」って踊りだしたこともあったね、最初はタイ語を覚えたりしたけど、ベトナム語が一番難しかったな。最初はもう本当に町中の一般の飲み屋で話し方を覚えたりしてね。学校はいろんなところにあるけれど、やはり語学を身につけようと思ったら「何しろ自分で使

うこと」ってということなんですね。

林：東南アジアの淡水性魚類の生物地理学的な研究をされた中で、日本の淡水魚類の生物地理学と比較されるようなこともあったのでしょうか。

多紀：最初はガマ口（ライギョ）なんかに興味を持ったけれどね、標本で形態を調べてみたけれど近しい類縁関係はなかったですね。日本の淡水魚っていうのは、やっぱり確かに中国・朝鮮半島の影響を強く受けていることは確かだと思いますけども。ベトナムとか、あそこまで南に行ってしまうと日本との比較はちょっとね。かなり離れているんですよ。だからベトナムからタイにかけてなんかでも北側には中国との国境の間に高い山々があるでしょ。だからそういうところにはまた珍しい魚がいるんですよ。

林：中国での魚類調査はされましたか。

多紀：中国は弱いな。かつてメコン川のヴィエンチャンからかなり上流にあるラオス北部のルアンパバーンというところに調査に行った時の話だけだね。川の向こう側でマイクを使ってこっちに何か言っているやつがいるわけさ。僕はその中国語が良く解らなかったんだけど、その時に同行していたラオス人の通訳によれば「そこでもって魚捕りをしている奴ら、ここは駄目だからどきなさい」って中国側の岸からマイクとスピーカーで言われてね。だからそこで言葉が解らず下手に魚を捕っていたらこっちが殺されていたかもしれない。メコン川の調査のときなんか、僕はラオスにはUSAID (United States Agency for International Development) で、要するにアメリカ政府と契約して国際開発局の専門家としての契約で行っているわけ。だからUSAIDで行く場合はメコン川の上流なんかへも何十キロと平気でいけるんですよ。政府の専門家であるアメリカ人もたくさんいるわけで、プロペラ機の飛行機だけど定期便があって方々へ出かけられるわけ。飛行場へ行けば自分の名前を書くだけで、USAIDのいわばステータスがあるからどこにでも行ける。当時のラオスはアメリカの国際環境開発局の職員が実際に運営していたので、双発のプロペラ機が飛ぶんです。その中にはミルク・ラン（牛乳配達）という定期便もあってね。ミルク・ランのときは、公務で行く偉い人はグレード1とかグレード2でね。家族が3, 4とか。飛行場に行っても大した手続きもなく、名簿に自分の名前とグレードが書かれているので「グレード3の人早く乗って」なんて言われてさ。だからそういう意味では、道なき道をジープで行くとか、メコン川を小舟で行くということもなく、アメリカのミルク・ラン便をよく使っていたわけ。だからあんまり調査で苦勞の多い体験はしてないんだな、牛乳配達ってなかなかのものだったね。

林：メコン川の調査をされて、一番思い出に残っていることは何でしょうか。

多紀：メコン川の調査で思い出に残るものね。やっぱり魚類相の比較とかでしょうな。メコン川の上流と中流は似ているけど下流とは違うとか、「タイのプラチャヤ

側の川はこうでもって、当時は大陸移動によって河川の取り合い（河川争奪）があったとか、研究がそういう方向にいつちやうわけだから「生物地理」もやるようになるんだね。あれだけ大きな川でも「河川争奪」みたいなものがあるわけだね。その結果こういう魚類相ができたってことだね。あの辺に生息する淡水魚の中にも歴史的に古いグループというか、上流で孤立した生活型の魚もあるし、やはりあの辺りの東南アジアの島嶼（とうしょ）なんかは、歴史的に結構くっついたり離れたたりしているわけさ。で、その辺の状況から色々な面白い種の構成ができあがっていくわけだね。

林：アジア諸国の場合は、魚類の化石が発見されにくい地層が多いといわれていますが、調査された東南アジアの地域から化石魚の標本のようなものは、

多紀：魚の化石というのはないですね。熱帯雨林の環境は残りにくい地域なんだな。

東京水産大学へ戻って

林：東京水産大学で教鞭をとられていた頃の話をお聞かせください。

多紀：いつ頃だろうなあ。昭和58年頃には安田君、藤田（清）さんがいたし、私はそのころは資源研だったからね。安田君が亡くなられて藤田（矢郎）さんが後任になったのかな。私の前の魚類学講座の教授は、九大から来られた藤田矢郎さん、フグのね。当時は服部（仁）さんもいたね。安田君は私と違って、泥んこ混じりの場所にいる魚でなく、わりあいと綺麗なサンゴ礁の魚が好きでね。ちょっとした研究ネタを使って大きな本を作るとか、彼はそういう才能があったな。

岡部：先生の学生指導については、学生の自主性を重んじられて、学生の発想を生かすという指導のされ方だったと思うのですが。

多紀：うん。そうだな。確かに、わりあい学生とはいろんな機会を見て話すことが多かったかな。卒論学生にもね、「君たちがやっているテーマは私よりも君たちのほうが専門家なんだから、自由に自信持ってやりなさい」って言っていたほうだから。ちょっと放任的だったかな。安田君とはかなり違っていたんだろうね。僕は大学で学生を教えたりすることと、自分がフィールドに行って調査研究するのとどっちが好きだったかという、それは調査のほうでね、そっちのほうが好きだったな。だから生徒には勉強でも、研究や調査でも“教える”というよりも、もっと“面白がれ”というような指導だったんじゃないかな。“面白み”はここにあるんじゃないのかとか。その手法を教えるのではなくて“面白みを見つけたか”というような、そんな感じだったろうな。

岡部：ところで先生はNHKテレビで釣り番組にも出演されていたのを覚えているのですが？

多紀：ああ、あの釣り番組（趣味講座・釣り入門）ね。安田君が具合悪くなったので私が彼のピンチヒッターで出たわけで、司会者が番組の最初に歌をうたったりして

ね。それで番組の担当者に最初に言ったのは「俺は長年釣りはやってきたけれど、釣りの解説をするだけじゃなく、釣られるほうの解説もするから」ってね。その当時は大学院生も出演させて、イシモチの頭の中にはこういう耳石が入っているから「イシモチ」という名前があるなどという解説をしていたな。私は専門が違うので魚の解剖だとかはあんまりやらないので、その辺の指導は藤田（清）さんとか服部さんとかでしたね。

林：今年（取材時）は魚類学会が設立50周年を迎えます。学会設立当時やその後の運営に関われた話をお聞かせください。

多紀：僕は魚類学会に関連ある仕事はあまりしてなかったと思います。国外で仕事していたほうが多かったのですね。当時の魚類学会はいつも東京水産大学で年会有ってね、水産学会の後だったと思いますよ。ああいう年会準備というのは嫌いだったので逃げていたの。藤田（清）さんや服部さんは大変だったと思いますね。ただ当時、皇太子殿下が年会には出席されることがあったので、その時は大学の正門でお出迎えをして、皆と一緒に会場にご案内するところまではやりましたよ。あとは退官するまでの間であまり魚類学会と関連した仕事はそんなにしてなかったと思いますよ。

林：卒論学生や大学院生は学内だけでなく、学外の施設やフィールドで制作することもできたわけですね。

多紀：はい、結構いましたね。うん、だからさっき話した森岡（伸介）君は大学院時代にサバヒーの研究のためフィリピンへ行ったりしてね。彼が仕事についてからはマダガスカルにも行きましたね。

林：実験で使った魚や採集で集めた魚を保存したり残しておく資料室のような施設はあったのでしょうか。

多紀：資料館みたいな施設があったけれど、あんまり立派なものではなくて、以前はクジラの標本が置いてあっただけでしたけれど、段々とよくなって標本室まである博物館になりましたね。その博物館には兼任で担当の先生が決まっていたと思いますよ。

生物地理学の調査研究に必要なこととその面白み

林：日本人研究者としては珍しく熱帯アジアの魚類相を研究テーマにされた理由は何でしょうか。

多紀：確かに当時は泥んこの川に這いつくばって魚の研究する人はいなかったね。私が最初ってことなのかな。今は生物地理学をやろうという人が少ないことは確かで、分子生物学での遺伝的な関連性を用いて種の地域性を見ている人が多くなっているけれども、フィールドに自分が出る前にそっちのほうの分析能力を先に養うことになるから、自分で魚を採集してくることができない。もう何十年もすれば「すごそうな論文」が書けるだろうなという人は知っているけれど、今はまだ分析が忙しくてなんて言っているね。要するに魚類形態学、アイソザイム、DNAだのというのもいいんだけど、それだけでというよりは地誌学的な知識をもっとしっかり入れないとイン

ターリレーションシップは分かるけども、生物地理学はできないよね。それと今は必要な情報がインターネットやテレビでなんでも好きなものを得られるからいいんだけど、やっぱり自分で情報を発信するような、夢みたくない理想がないのかなと思うんですよ。だから魚類の分布調査をするだけでなく、陸地の繋がりとその魚類の繋がりがどうしてそうなったか、どうやって繋がったのかというような、そっちのほうがかんたんに面白いよね。そういう視点からの生物地理学的な研究というのは少ないような気がするね。今までの上位タクサの魚の分類は、ネルソン (J. S. Nelson) が一番初めに作った「Fishes of the World」に従ってやってきたでしょ。今は第5版になっているけれども、第5版はネルソンが亡くなっているの、主に遺伝子を専門としている人たちが作ったわけです。その結果は、これまでの系統分類の手法でやってきた人たちがすべて受け入れられるかという、多分それはない。生物地理なんかからみてもあれをそのまま利用すると、いや、そんなことはないという感じだね。だって生物地理というものは魚だけでそういう結論を出すためにやる学問ではなくて、普通に生物学やっていれば自然に生まれてくるもので、生物学の中のディスカッションとしてやれば良いわけで。生物地理をもしやるのであれば、生物地理で分かった結果を今度は大陸の地質学の問題としても考えるようなね。

林：これまでの研究を振り返ってみて、生物地理の研究対象としてドジョウやナマズの他に興味をもった魚はありますか。

多紀：東南アジアでのドジョウやナマズの調査や研究はよかったというよりも面白かったな。それで他に何かといわれても実際にやってみないと面白いのか面白くないのかということは、経験していないと分からないよね。正直いって東南アジアではほかの仕事で手一杯でしたからね。自分の発想力や頭脳力からいってもドジョウとナマズ以上にあまりできなかった。こんなもんですよ。だから何か他にやるならそういう基礎研究なくしてできること、いろんな雑誌に連載で自分のストーリー、つまり調査研究談のことで書いたら面白いかと思うようになったわけで。それも上手くはできないけれど、お茶濁しながら今まで色々な一般雑誌には書いたんですよ。例えば「フィッシュ・マガジン」や「アクアライフ」とか、「アニマ」にはずいぶん連載したかな。そういう月刊誌に連載したものをまとめた1冊本にしても、やっぱり自己満足だけみたいな感じがしましてね。フィールド・ノート形式の内容を入れたりしてね。ただ中身だけを学会誌のように読まれても、ああいう雑誌では面白くないので。だから採集記なら採集記のような形で実際は終わらせると良いわけ。「魚紳士録」を書かれた木村重先生ね、あの老先生の文章なんかは良かったな。特に僕は木村先生の人柄に惚れていたんで。訪ねて行ったこともありましたよ。

林：これからも魚の研究を続けられますか。

多紀：いや。今もう研究らしい研究は続けられないから、だから軽い文章を普通の雑誌に投稿するようなことをやって、それを煮詰めればなんとか研究史みたいなものになるだろうと思うけど。そうでなく研究論文だけを作ろうとすると、何か自分ではもう面白くないと思うようになっているな。一般向けに、東南アジアの魚の魅力や地史の魅力を紹介する本を出版してはと言われると、そういうのは今でも面白いと思うけれど、このごろ自分があんまりそういうことをやる雰囲気じゃないな。年齢的なものではないのだけれども。研究を始めればやるわね、面白いから。だけどその成果を一般向けに面白く随筆的なものにするだけの、その内容となるものが今は自分の中に取りこめないでしょうな。この年齢になると魚についてのインフォメーションというのは、自分にとって今回のインタビューで魚の話ができるような非常に稀なケースだけであってね。あとは一般論的な新聞と週刊誌からのネタぐらいいいもんね。だからたまに奥谷(喬司)や村野(正昭)、有馬(武治)さん等と会った時も研究の話は少しも出ない。いわゆるお互いになるほどと思える世間話だけだね。

取材と編集を終えて

取材を行ってから2年余り。当時の先生は米寿も近いお年ながら、まだまだカクシャクとされており、一を聞けば十も二十もお話しになる。言葉の泉は溢れんばかりでした。多くの兄弟弟子がいる中、私がインタビュアーでよいのかと、少し迷いましたが、東京水産大学魚類学研究室で最初に指導を受けた修士学生として、お聞きしたかったことはほぼ、引き出すことができたのかなと思います。

先生の訃報に接したのはこの3月24日、亡くなられたその日に渋谷浩一君から伝わった情報を、先生のインタビューで同席した林公義氏が電話で知らせてくださいました。昨年来、体調を崩されることが多くなられたとは聞いていました。ご存命の内に「先達に聞く」の掲載が間に合わず、甚だ残念ではありますが、先生からいただいたご薫陶を胸に、これからはもっと面白がって仕事をしていきたいと思えます。多紀保彦先生のご冥福を、心よりお祈りします。

本稿において多紀先生が名字で語られた方々については、先生の同級生である秋元義正、奥谷喬司、野中忠氏らお三方に、当時の記憶をたどってのご助言をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます(岡部記)。

(林 公義 Masayoshi Hayashi : 〒1008-111 東京都千代田区千代田1-1 皇居内生物学研究所 e-mail: masayoshi.hayashi@kunaicho.go.jp ; 岡部 久 Kyu Okabe : 〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町養老子 神奈川県水産技術センター e-mail: okabe.4wwh@pref.kanagawa.jp)

魚類学雑誌 67(2):309-310
2020年11月5日発行

追悼

多紀保彦先生との思い出

2020年2月24日(火)朝7時18分、ご子息から「危篤という連絡があったので病院に向かいます」、続いて7時30分には「間に合いませんでした」というLINEが入りました。東京海洋大学名誉教授の多紀保彦先生が亡くなりました。

多紀先生は自由奔放でした。1978年、私が学部3年生の時に出入りしていた東京水産大学魚類学講座(現東京海洋大学魚類学研究室)では、ジャック・モイヤー(Jack T. Moyer)さんとともにギターを持って、歌にお酒に大暴れをしていました。かと思えば1979年に、私にとっては初めての海外旅行となったイギリス、フランス、イタリアを回った時には、私は毎晩ホテルで魚類学講座の教授であった安田富士郎先生とお金の勘定をしていたのですが、多紀先生はその横のベッドでゲーゲーと鼾をかいて寝ていました。多紀先生と安田先生は、東京水産大学の昭和25(1950)年度入学式で前後に並んで以来の友人です。

また、興味のあることには子どものように目をキラキラ輝かせて楽しんでいました。その究極が、東京水産大学の水産資源研究施設に助教授として在籍しながらも、東南アジア漁業開発センター養殖部局(フィリピン共和国イロイロ市)に二年間も滞在したこと。大学で教鞭を執ることよりも、ご自身が海外で夢中になれることに突き進んでいました。これは、もともとダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』大好き少年(多紀先生からはよくこの物語を聞かされました)から東京農業大学時代の「万国どじょう掬いの旅」に連なる出来事であり、多紀先生にとっては必然であったのかもしれない。

しかし、それが私の身の上に及んだのは、必然ではなく偶然でした。1981年10月、体調を崩した安田先生に代わって、多紀先生が代役を引き受けてくださいました。私たちの結婚の仲人です。翌年、安田先生が亡くなったあと、多紀先生からポツリと言われました・・・「お前の面倒は見てやる」。それから2年後、博士号を取得してすぐに命じられたのは「東南アジアを勉強しろ」(東南アジアの魚類でもなく魚類学でもありません)の一言でした。私はデフォーにも万国にも興味はなかったのですが、その一言で、それから7年ほど、東南アジアを中心にして、中米のジャマイカからエジプト、インドなどでいろいろな経験をさせてもらいました。とくにフィリピンでは、多紀先生の赴任中に呼び寄せられ、朝から晩まで、週に一度は翌朝まで、あれやこれやと勉強をさせてもらいました。結局私は、三年間をフィリピンで過ごした後、さらにインドネシアで二年間の単身赴任を経験

し、1991年の7月に東京水産大学の助手として多紀先生に呼び戻していただきました。

興味のあることには目をキラキラと輝かせるということは、逆にいえば興味のないことにはまったく無関心なのが、私から見た多紀先生でした。フィリピンの東南アジア漁業開発センターに赴任したのも、半分はキラキラと目を輝かせ、半分は東京水産大学の水産資源研究施設での仕事、つまり大学の仕事から目を背けていたのではないのかと、私は思っています。大学ではいろいろな人たちが会議や打ち合わせで先生の研究室に出入りしていましたが、先生の態度は話の内容によってははっきりと二手に分かれるように見えました。意気投合し、そのまま飲み会へ、というのはキラキラの方で日常茶飯でした。しかし時には、最初からあまり関心のない話や、あまり気乗りのしないような訪問者であったりすると、無関心を突き通されました。今でいう「大人の対応」などということはありませんでした。凡人である私は、幾度となくハラハラとさせられ、時には心にもないお追従を言ってフォローしていました。

キラキラと無関心(=とにかく好き嫌い)がはっきりしていました。好き嫌いでいえば、ちょっと衝撃的ですが、大学の研究室もあまり好きではなかったのかもしれ



写真1. 定年記念パーティーでギターをつま弾く多紀保彦先生(1995年3月、東京水産大学(現東京海洋大学)・学生実験室)。



写真2. プレ米寿の集まりで卒業生と談笑する多紀保彦先生 (2017年8月, 高輪プリンスホテル).

ません。「研究室の学生さんたちが好きではない」ということではなく、「研究室全体の研究の面倒をみることに興味がない」という意味です。学生さんによっては、多紀先生の研究指導がかなり淡白な印象に映ったのではないかと思います。もちろん興味のある研究については徹底的に追及していましたし、「～学」といった垣根もありませんでした。多紀先生が最初に出した博士号取得の学生はフィリピンからの留学生でしたが、そのテーマが魚類ではなく「テナガエビの遺伝と生物地理」であったことがそれを示しています。学生さんたちのことは大好きでした。というか、研究室の宴会系の行事は大好きでした。それは1970年代の終わりに魚類学講座で大騒ぎをしていたころとまったく同じです。

もちろん、物事を追求する方法やその結果をどのようにに伝えるのかということに関しては、多紀先生ご自身が日々身につけていたお洒落なコーディネートのようにかなりうるさく、いろいろと教え込まれました。最初は四十数年前の私の卒論でした。うんうんと唸って書き上げたメカジキの初期発生英文原稿をお持ちすると、目の前で真っ赤かにして原稿をパーッと私へ投げられてニコニコしながら、「これ(おそらく赤ペンによる添削だけではなく「パーッ」もでしょう)をやってみたかったんだよね」と言われました。私は心の中で(そんなバカな)と呟いたあの時から40年間ほど、体調を崩すここ数年間まで、私の書いた英文の多くを添削してもらっていました。フィリピンでも朝な夕なに研究の話をしてきましたが、その主な話題はアプローチの仕方やフィリピン特有の英語についてでした。語学にはかなり関心があり、よくナショナル・ジオグラフィック(National Geographic)誌を読みながら、二人で英語の表現の仕方や英語の書き方、日本語との違いなどを話し合いました。そのころの多紀先生は、マダガスカルでどじょう掘いをしていたころのフランス語で書かれた野帳を、いつも手元に置いていました。

多紀先生の東京水産大学の在籍期間は1977年から95

年までの17年間ですが、実は魚類学講座の教授だったのは1989年からの6年間だけでした。私は1991年の7月から助手を勤めましたので、研究室で一緒にしたのはわずか3年半ほどです。

私にとっては「へそまがり魚類学」を地で行っていた多紀先生でした。あまり研究室とかにこだわることもなく、またあまり弟子を育てるという意識もなかったのかと思います。だからこそ私が多紀先生の跡を継いで、魚類学研究室に今いるような気がします。ただ、私にはすこし気がかりなことがあります。多紀先生の定年退官の日に「君は魚類学の王道を行け」と言われたことです。私の仁徳に至らず、また師匠と同じように私のおへそもグイッと曲がっているのか、王道を行くことができなかったのが少し残念です。

最初の出会いから四十数年、多紀保彦先生、本当にありがとうございました。

(河野 博 Hiroshi Kohno : 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学魚類学研究室 e-mail: hirokun@kaiyodai.ac.jp)

魚類学雑誌 67(2):310-315
2020年11月5日発行

Dr. John E. Randall の逝去を悼む

皆様すでにご承知のことと推察いたしますが、沿岸性魚類研究の大家 Dr. John E. Randall (以下ランドール博士; 親しみをこめて友人は彼のことをJackまたはJack Randallと呼ぶことも多い) が去る2020年4月26日ハワイ州カネオヘのご自宅で逝去されました。享年95歳でした。

博士は1924年5月22日ロスアンジェルスで生まれ、1950年にUCLA (University of California, Los Angeles)・動物学専攻を卒業の後、1955年にはハワイ大学から博士号を授与されました。ハワイ大学で共に学んだヘレン(Helen)さんと1956年に結婚され、ビショップ博物館で主任学芸員として1965年から2009年までにわたり勤務されました。高校時代はロスアンジェルス郊外のタイドプールで魚の観察に熱中し、多くの時間を過ごされたようです。父親は博士が建築家になることを望んだようですが、高校時代の魚類観察が博士の研究生生活を方向付けたようです。博士の潜水好き、健康ぶりは2014年の90歳の誕生日にハワイでSCUBA潜水したことにも示されています。SCUBAを魚類の生態観察に用いた開拓者ともいえます。

博士の日本魚類学会への寄稿は1970年代から続き、80年代から90年代まで多数なされましたが、今世紀に



写真 1. 魚類標本を撮影中のランドール博士（1987年9月撮影；パイル博士提供）。標本を入れたガラス容器を背景黒色にした台に載せ、ハレーションを押さえるため、標本は完全に水に浸け、複数の光源を用い撮影。カメラは35 mm 版ではなく、常にブローニー版を使用していた。

入ると少なくなり、若い会員の方々にとって博士は必ずしも馴染みが深くないかもしれません。しかし、博士の魚類学に対する貢献度は極めて大きく、博士の研究への取り組み、我が国の研究者との接点、日本魚類学会への貢献などを紹介し、改めて博士のご冥福を祈りたいと思います。

ランドール博士の沿岸魚類研究 博士を特徴づけるのは論文数の多いこと、世界各地の魚類相を博士自身が撮影した生態写真を使って紹介した書籍の多いことでしょう。博士の著した論文数は900を超え、記載した新種数は834種で、さらに20-30種が今後も発表される予定であるとビショップ博物館のDr. Richard Pyle（ランドール博士の門下生のお一人で現在は博士の後任の主任学芸員；以下パイル博士）から聞いています。800種を超える新種の記載は博士の魚類分類に対する直向な情熱によるものであることは言うまでもありません。しかし、同時にSCUBA、カメラとそのハウジングなど、機器の発展の歴史とも一致しており、その発展も博士の魚類学への情熱を後押ししたといえるでしょう。1900年代の前半では魚類標本は既存の漁具・漁法に頼ることが多く釣り漁具、網漁具では採集しにくい潮間帯下部、特に岩礁域に生息する魚種、ベラ類、ハゼ類、スズメダイ類など

の資料は得にくく、研究者自らが潜水することにより、それまでは得難かった小型の種も採集可能となりました。泳ぎの速い中・大型の魚類を得るには鉈が使われましたが、博士はその鉈の先端部を細い3本鉈として（博士はmulti-prong spearと称していた）魚体の損傷を軽減、かつ捕獲効率の向上を図るなど、採集具の改良でも工夫を凝らしていました。従来の鉈先は一本で太く、返しがあるので鉈で得られる個体の標本としての価値は必ずしも望ましいものではありませんでした。また、潜砂性のイカナゴ類やアナゴ類などを採集する際には魚が潜った場所にプラスチックの薄いフィルムを被せ、周辺でほかの魚種を観察・撮影するなどして時間をおき、目標とする魚が呼吸困難に陥り、被せたフィルムまで泳ぎ出のを待って捕獲するなど、筆者には想像もできない採集方法を考案されていました。これらの創意・工夫は博士の幼年期の潮だまり観察経験から培われたものであろうことは想像に難くないでしょう。

博士の専門分野は分類学と生態学と多くの方に判断されていますが、その基礎として、岩礁性魚類の食性の研究にも熱心でした。その成果の一部として魚類シガテラ毒化の過程を明らかにしました。シガテラ毒魚にはプランクトン食性の魚がいないこと、毒化が進行するには草食性魚の毒化に始まり、次に肉食性魚が毒化するなどの事実から突き止められ、シガテラ毒の解析に重要な役割をも演じました（Randall, 1958）。

1950年代からは魚類の水中之での生態写真撮影技術を磨き、その成果はカリブ海（Randall, 1983）、グレートバリアリーフ（Randall et al., 1990）、オマン（Randall, 1995）、ハワイ（Randall, 1996）、南太平洋（Randall, 2005a）などの海域の魚類相をランドール博士ご自身が撮った生態写真を多用して紹介しています。その鮮明な生態写真は、魚類学研究を志す国内外の若い研究者にとって良き指標となり、世界の魚類生態観察のまさしく先駆けとなりました。また、ランドール博士は魚類の擬態研究の先駆者でもあります。すでに1960年代にモデルであるホンソメワケベラ *Labroides dimidiatus* とニセクロスジギンボ *Aspidontus taeniatus* の攻撃的擬態種の関係を記載していますが（Randall and Randall, 1960）、共著者は奥様のヘレンさんであることからご夫妻の素晴らしい研究協力関係も窺えます。特にランドール博士が潜水観察の結果から岩礁性魚類の擬態の総まとめともいえる抄録にはRandall (2005b) があります。

オランダ東インド陸軍の軍医で魚類学者でもあったDr. Pieter Bleeker（以下ブリーカー博士）は19世紀の半ばにインドネシアに滞在し、オランダに1860年に戻ると1862-1978年の間にAtlas Ichthyologique（全36巻）を著わしました。ブリーカー博士が生涯に記載した新種は1932種にのぼりますが、パイル博士はそのうちの有効種は839種と推定しています。パイル博士は2005年台湾で開催された第7回インド・太平洋魚類国際会議（Indo-Pacific Fish Conference）でフィジーのサンゴ礁下部

水深 50–150m の範囲から約 40 種の未記載種を確認し、その経験から今後全世界のサンゴ礁下部水域から約 2000 の新種が記載されるであろうとの予測を発表しました。そして、この 2000 種がブリーカー博士の記載した種数と近似するので 2000 種を「1 ブリーカーユニット (1 Bleeker unit)」としたいと冗談混じりに述べました。しかしながら、ブリーカー博士の記載中有効種は 839 種であるので記載種数としての単位「1 ブリーカーユニット」を 839 種に変更すべきだとパイル博士は言っています。つまり、記載種の多さではブリーカー博士の 839 種に対してランドール博士は 834 種と迫っています。近い将来公表されるであろう博士の記載種、約 30 種 (パイル博士からの私信) を含めるとブリーカー博士の記載種数を優に超えます。19 世紀と 20 世紀後半とでの種記載についての難易度を考慮すると、現在に近づくほど既知種が増加するので不利となりますから、834 種という記載種数はブリーカー博士のそれを実質的に凌駕しているといえるに違いありません。種の記載という点で魚類分類学史上、博士の偉業を超えることは今後、まずないでしょう。

一方、博士が新設された属は、トビハタ属 *Triso* Randall, Johnson and Lowe, 1989, スジハタ属 *Gracilla* Randall, 1964, ベタハゼ属 *Platygiobopsis* Springer and Randall, 1992, ミヤビベラ属 *Terelabrus* Randall and Fourmanoir, 1998, オオヒレテンスモドキ属 *Novaculoides* Randall and Earle, 2004 など 25 属もあります。特に *Triso* の記載は *Ichthyological Research* に寄稿されたものです。 *Platygiobopsis akihito* Springer and Randall, 1992 (ベタハゼ属のタイプ種) の種小名は上皇陛下に献名されたものでした。記載当時、本邦産の種は確認されていなかったのですが、沖山宗雄博士により本属第 2 番目の種としてベタハゼ *Platygiobopsis tansei* Okiyama, 2008 が記載されました。また、 *Terelabrus rubrovittatus* Randall and Fourmanoir, 1998 (ミヤビベラ属のタイプ種) は記載当時 1998 年本邦から当時未記録でしたが、鹿児島県の硫黄島からも得られ本村浩之博士らによりアマナミヤ



写真 2. 小笠原調査に向かう際、小笠原丸でくつろぐランドール博士 (1991 年 5 月撮影)。採集と標本作製には時間と経費を惜しまない博士であっても、移動については通常のクラスでも全く頓着されなかった。

ビベラの和名が提唱され、さらに同属のキスゲミヤビベラ *T. dewapyle* Fukui and Motomura, 2015 も記載されました。14 属は、現在本邦産の種は確認されていませんが、多くは 1 属 1 種であり、ランドール博士が沿岸性魚類の形態にいかにか精通していたかを物語っているようにも思われます。複数種からなるのは、提唱した 1/3 の 8 属しかありません。また、ヤセエビス属 *Pristilepis* Randall, Shimizu and Yamakawa, 1982 は我が国の研究者、清水 長氏と山川 武氏との共著でもあります。ランドール博士が記載した属にはベラ科 7 属、ハゼ科 4 属、ゴンベ科 4 属などがあり、また、ハゼ科 *Larsonella* Randall and Senou, 2001 は瀬能 宏博士との共著であります。これらの属も構成種は 1–4 種からなるものであり、博士の提唱した属の特異性の一端が示されているのかもしれませんが。

ランドール博士の論文研究には“A review of …”あるいは“Revision of …”のように科や属の総説論文が少なくありません。その対象はゴンベ科、ハゼ科、ベラ科など沿岸性の小型魚類が多くみられます。小型魚類だけに関心があったようにも見えるかもしれませんが、ガラパゴスザメ *Carcharinus galapagensis* (Randall, 1963)、ホホジロザメ *Carcharodon carcharias* (Randall, 1973)、サカタザメ属 *Rhinobatos* (Randall, 1995) など中・大型魚類に関する研究も発表されており、博士の実際の研究対象は実に広範囲に及んでいます。

我が国の研究者との交流 我が国の分類研究者との交流は松浦啓一博士と座間 彰博士に始まり (Randall et al., 1978)、1980 年代には後述するように多くの共同研究があります。しかし、シガテラ毒や粘液毒の分野での交流は分類学の分野に先行しています。ハワイ大学では博士を含むグループが 1960 年代にシガトキシンを同定し、60 年代後半にはハワイ大学と東京大学 (橋本芳郎博士) らとの共同研究が実施され、成果は 70 年代前半に公表されています (Randall et al., 1971; Yasumoto et al., 1971)。このように博士と我が国の研究者との交流は 60 年以上も前にさかのぼることができます。

ランドール博士と学会誌 博士と日本魚類学会との関連は 1970 年代に始まります。1974 年から 2008 年までの間に、計 35 編の論文が *Japanese Journal of Ichthyology* 誌 (27 編) ならびに *Ichthyological Research* 誌 (8 編) に寄稿されました (以下のリストを参照)。1990 年代に入ると、*Ichthyological Research* 誌への海外研究者の寄稿が増加しており、海外の研究者が学会誌に多く投稿されるように博士が導入役を果たしてくださったものと信じています。

1. Randall, J. E. and R. C. Wass. 1974. Two new pomacanthid fishes of the genus *Centropyge* from Oceania. *Jpn. J. Ichthyol.*, 21: 137–144.
2. Randall, J. E. 1975. Notes on the Hawaiian filefish *Pseudomonacanthus garretti*. *Jpn. J. Ichthyol.*, 21: 223–226.
3. Shepard, J. W. and J. E. Randall. 1976. Notes on the labrid fish, *Stethojulis maculata* from Japan. *Jpn. J. Ichthyol.*, 23:

- 165–170.
4. Randall, J. E. and P. C. Heemstra. 1978. Reclassification of the Japanese cirrhitid fishes *Serranocirrhitus latus* and *Isobuna japonica* to the Anthiinae. *Jpn. J. Ichthyol.*, 25: 165–172.
 5. Randall, J. E., L. A. Maugé and Y. B. Plessis. 1979. Two new anthinae fishes of the genus *Holanthias* from the southern and western Pacific. *Jpn. J. Ichthyol.*, 26: 15–25.
 6. Randall, J. E. and F. Yasuda. 1979. *Centropyge shepardi*, a new angel fish from the Mariana and Ogasawara Islands. *Jpn. J. Ichthyol.*, 26: 55–61.
 7. Randall, J. E. and R. Lubock. 1981. Labrid fishes of the genus *Paracheilinus*, with description of three new species from the Philippines. *Jpn. J. Ichthyol.*, 28: 19–29, 2 pls.
 8. Randall, J. E., H. Ida and J. T. Moyer. 1981. A review of the damselfishes of the genus *Chromis* from Japan and Taiwan, with description of a new species. *Jpn. J. Ichthyol.*, 28: 203–242.
 9. Randall, J. E., T. Shimizu and T. Yamakawa. 1982. A revision of the holocentrid fish genus *Ostichthys*, with descriptions of four new species and related new genus. *Jpn. J. Ichthyol.*, 29: 1–26, 2 pls.
 10. Randall, J. E. and G. J. Stroud. 1985. On the validity of the mugiloidid fish *Parapercis robinsoni* Fowler. *Jpn. J. Ichthyol.* 32: 93–99.
 11. Randall, J. E. 1985. On the validity of the tetraodontid fish *Arothron manilensis* (Procé). *Jpn. J. Ichthyol.*, 32: 347–354.
 12. Randall, J. E. and P. C. Heemstra. 1986. *Epinephelus truncatus* Katayama, a junior synonym of the Indo-Pacific Serranid fish *Epinephelus retouti* Bleeker. *Jpn. J. Ichthyol.*, 33: 51–56.
 13. Pietsch, T. W. and J. E. Randall. 1987. First Indo-Pacific occurrence of the deepsea anglerfish, *Diceratias pileatus* (Lophiiformes: Diceratiidae). *J. Ichthyol.*, 33: 419–421.
 14. Randall, J. E. and L. Wrobel. 1988. A new species of soldierfish of the genus *Ostichthys* and records of *O. archiepiscopus* and *O. sandix* from Tahiti. *Jpn. J. Ichthyol.*, 35: 243–246.
 15. Randall, J. E., G. D. Johnson and G. R. Lowe. 1989. *Triso*, a new generic name for the serranid fish previously known as *Trisotropis dermopterus*, with comments on its relationships. *Jpn. J. Ichthyol.*, 35: 414–420.
 16. Randall, J. E. and L. J. McCarthy. 1989. *Solea stanalandi*, a new sole from the Persian Gulf. *Jpn. J. Ichthyol.*, 36: 196–199.
 17. Yamakawa, T. and J. E. Randall. 1989. *Chromis okamurai*, a new damselfish from the Okinawa Trough, Japan. *Jpn. J. Ichthyol.*, 36: 299–302.
 18. Randall, J. E. and M. Hayashi. 1990. *Apogon selas*, a new cardinalfish from the western Pacific. *Jpn. J. Ichthyol.*, 36: 399–403.
 19. Springer V. G. and J. E. Randall. 1992. *Platygiobopsis akihito*, a new genus and species of gobiid fish from Flores, Indonesia. *Jpn. J. Ichthyol.*, 38: 349–355.
 20. Hatooka, K. and J. E. Randall. 1992. A new moray eel (*Gymnothorax*: Muraenides) from Japan and Hawaii. *Jpn. J. Ichthyol.*, 39: 180–190.
 21. Randall, J. E. and J. Earle. 1993. *Scarus obishime*, a new parrotfish (Perciformes: Scaridae) from the Ogasawara Islands. *Jpn. J. Ichthyol.*, 39: 287–293.
 22. Randall, J. E. and H. Ida. 1993. *Pseudamia rubra*, a new cardinalfish (Perciformes: Apogonidae) from the Ogasawara Islands. *Jpn. J. Ichthyol.*, 40: 11–14.
 23. Ishihara, H., K. Homma, Y. Takeda and J. E. Randall. 1993. Redescription, distribution and food habits of the Indo-Pacific dasyatid stingray *Himantura granulata*. *Jpn. J. Ichthyol.*, 40: 23–28.
 24. Ida, H. and J. E. Randall. 1993. *Ammodytoides kimurai*, a new species of sand lance (Ammodytidae) from the Ogasawara Islands. *Jpn. J. Ichthyol.*, 40: 147–151.
 25. McCosker, J. E. and J. E. Randall. 1993. Finless snake-eels of the genus *Cirricaecula* (Anguilliformes: Ophichthidae), with the description of *C. macdowellii* from Taiwan. *Jpn. J. Ichthyol.*, 40: 189–192.
 26. Randall, J. E., M.-L. Bauchot and P. Guézé. 1993. *Upeneus japonicus* (Houttuyn), a senior synonym of the Japanese goatfish *U. bensasi* (Temminck et Schlegel). *Jpn. J. Ichthyol.*, 40: 301–305.
 27. Randall, J. E. and T. Shimizu. 1994. *Plectranthias pelicieri*, a new anthiine fish (Perciformes: Serranidae) from Mauritius, with notes on *P. gardineri*. *Jpn. J. Ichthyol.*, 41: 109–115.
 28. Randall, J. E. and T. Yamakawa. 1996. Two new soldierfishes (Beryciformes: Holocentridae: Myripristis) from Japan. *Ichthyol. Res.*, 43: 211–222.
 29. Randall, J. E. 1999. *Halichoeres bleekeri* (Steindachner & Döderlein), a valid Japanese species of labrid fish, distinct from *H. tenuispinis* (Günther) from China. *Ichthyol. Res.*, 46: 225–231.
 30. Randall, J. E. and H. Senou. 2001. Review of the Indo-Pacific gobiid fish genus *Lubricogobius*, with description of a new species and a new genus for *L. pumilus*. *Ichthyol. Res.*, 48: 3–12.
 31. Masuda, H. and Randall, J. E. 2001. *Rabaulichthys suzuki*, a new anthiine fish from Japan. *Ichthyol. Res.*, 48: 77–81.
 32. de Carvalho, M. R. and J. E. Randall. 2003. Numbfishes from the Arabian Sea and surrounding gulfs, with the description of a new species from Oman (Chondrichthyes: Torpediniformes: Narcinidae). *Ichthyol. Res.*, 50: 59–66.
 33. Randall, J. E. 2004. On the status of the pomacentrid fish *Stegastes lividus* (Forster). *Ichthyol. Res.*, 51: 389–391.
 34. Randall, J. E., K. Sakamoto and K. Shibukawa. 2007. *Cabillus atripelvicus*, a new species of gobiid fish from the

Ogasawara Islands, with a key to species of the genus. Ichthyol. Res., 54: 38–43.

35. Hidaka, K., Y. Iwatsuki and J. E. Randall. 2008. A review of the Indo-Pacific bonefishes of the *Albula argentea* complex, with a description of a new species. Ichthyol. Res., 55: 53–64.

ランドール博士と筆者 博士と私との交流は1970年代からで、Dr. Jack T. Moyer (以下モイヤー博士)の紹介がきっかけでした。三宅島の魚類相を研究していたモイヤー博士のもとに、ランドール博士のお弟子さんであるDr. Gerald R. Allenがスズメダイ科の調査で三宅島を1973年に訪ねていました。その2年後にランドール博士ご自身が三宅島のモイヤー博士を訪ね、その際に筆者は初めて博士とお会いしました。博士はそれ以来の研究仲間というより、むしろ私達の指導的立場としていろいろなことを教えていただきました。現在は魚類標本作製の基本作業ともなっている細い針による鱗立て作業がありますが、この方法は博士が1961年に発表した手法であることを今日の我が国の若い研究者はご存じないかも知れません(Randall, 1961)。この魚類標本作成の基本作業を、私はモイヤー博士の三宅島の実験所でランドール博士から直接教示して頂きました。なお、ランドール博士は三宅島で採集したベラではミヤケベラ *Labropsis xanthonota* Randall, 1981 を記載しています。

博士との共著論文としてはRandall, Ida and Moyer (1981), Randall, Ida, Kato, Pyle and Earl (1997) などがあります。特に1997年の論文の後者の材料採集は、1990年から1992年の夏3回に及びました(写真1)。当時、博士は65歳前後でしたが、標本は全てSCUBAで採集したものでした。また深度70mのミズタマヤッコ *Genicanthus takeuchii* Pyle, 1997の標本をパイル博士が採集した以外は全採集に加わっていました。昼は潜水採集と水中撮影、上陸後はしばしの休息後に夕食をとり、休む間もなく採集標本の整形(展鱗・・・これには長時間をかけていらした)、固定、撮影(写真2)と全工程をおひとりで完遂され、門下生のパイル博士や私には一切、手を触れさせませんでした。ランドール博士の標本写真は恐らく全世界のどこの海でもご自身、おひとりで標本写真を撮られたものと推察しています。採集した標本は少なくないので、一連の作業は当然深夜に及ぶことが常であり、博士が黙々と作業を続けていた姿は今でも目に焼き付いています。そこで得られた成果のうち、ウスベニテンジクダイ *Pseudamia rubra* Randall and Ida, 1993とミナミイカナゴ *Ammodytoides kimurai* Ida and Randall, 1993の新種記載では共著論文となりました。

博士の浅海性の魚類に対する情熱は国内の多くの共同研究者が感じているものと確信していますが、一方で潜水採集が不可能な深い場所にいる陸棚性の魚類に対してはほとんど興味を持たれませんでした。具体的には筆者が研究対象としているイカナゴ科での例があります。ハワイ周辺の深さ200m付近から得られた珍しいイカナゴ科の標本をい

とも簡単に未記載種の標本として提供して下さり、硬い鱗という特徴を備えたイカナゴ科であるので筆者等がヨロイイカナゴ *Lepidammodytes macrophthalmus* Ida, Sirimontaporn and Monkolprasit, 1994として新属新種を発表することができました。

最後の共著は2014年に発表した西部インド洋のイカナゴ科魚類ですが(Randall and Ida, 2014)、最後まで私は弟子であり、ミナミイカナゴの1編を除くと第1著者にはなれなかったという意味で、まさに不肖の弟子であったのかもしれない。

ランドール博士の逝去を悼む 博士と我が国の魚類研究者との交流は1960年代から半世紀以上に亘わたって続き、博士の功績は我が国の日本魚類学会の発展にも大きく寄与されました。近年は歩くことより、泳ぐことの方が楽と冗談を話されていたようです。潜水と浅海性魚類をこよなく愛された博士のご冥福をお祈りしたいと思います。

引用文献

- Fukui, Y. and H. Motomura. 2015. A new species of deepwater wrasse (Labridae: *Terelabrus*) from the western Pacific Ocean. Zootaxa, 4040: 559–568.
- Ida, H., P. Sirimontaporn and S. Monkolprasit. 1994. Comparative morphology of the fishes of the family Ammodytidae, with a description of two new genera two new species. Zool. Stud., 33: 252–277.
- Okiyama, M. 2008. *Platygobiopsis tansei*, a new species of dorso-ventrally flattened gobiid fish from Southern Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, Suppl., 2: 85–96.
- Pyle, R. 1997. A new angelfish of the genus *Genicanthus* (Perciformes: Pomacanthidae) from the Ogasawara Islands and Minami Tori-Shima (Marcus Island). Rev. fr. Aquariol. Herpetol., 24: 87–92.
- Randall, J. E. 1958. A review of ciguatera tropical fish poisoning with a tentative explanation of its cause. Bull. Mar. Sci., 8: 236–267.
- Randall, J. E. 1961. A technique for fish photography. Copeia, 1961 (2): 241–242.
- Randall, J. E. 1963. A fatal attack by the shark *Carcharinus galapagensis* at St. Thomas, Virgin Islands. Caribb. J. Sci., 3: 201–205.
- Randall, J. E. 1964. Notes on the groupers of Tahiti, with description of a new serranid fish genus. Pacif. Sci., 18: 281–296.
- Randall, J. E. 1973. The size of the great white shark (*Carcharodon*). Science, 181: 169–170.
- Randall, J. E. 1981. Revision of the labrid fish genus *Labropsis* with description of five new species. Micronesica, 17: 125–155, Pls. 1–5.
- Randall, J. E. 1983. Caribbean Reef Fishes. T.F.H. Publications, Neptune City, New Jersey. 350 pp.
- Randall, J. E. 1995. Coastal Fishes of Oman. University of Hawai'i Press, Honolulu and Crawford House Press, Bathurst, New South Wales. xiii + 439 pp.
- Randall, J. E. 1995. A review of the guitarfishes of the genus *Rhinobatos* (Rajiformes: Rhinobatidae) from Oman, with description of a new species. Raff. Bull. Zool., 43: 289–298.
- Randall, J. E. 1996. Shore Fishes of Hawai'i. Natural World Press, Vida, Oregon. 216 pp.
- Randall, J. E. 2005a. Reef and Shore Fishes of the South Pacific: New Caledonia to Tahiti and the Pitcairn Islands. University of Hawai'i Press, Honolulu. xii + 707 pp.
- Randall, J. E. 2005b. A review of mimicry in marine fishes. Zool. Stud.,

44: 299–328.

Randall, J. E., K. Aida, Y. Oshima, K. Horii and Y. Hashimoto. 1981. Occurrence of a crinotoxin and hemagglutinin in the skin mucus of the moray eel *Lycodontis nudivomer*. *Mar. Biol.*, 62: 179–184.

Randall, J. E., K. Aida, T. Hibiya, N. Mitsuura, H. Kamiya and, Y. Hashimoto. 1971. Grammistin, the skin toxin of soapfishes, and its significance in the classification of the Grammistidae. *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.*, 19: 157–190.

Randall, J. E., G. R. Allen and R. C. Steen. 1990. *Fishes of the Great Barrier Reef and Coral Sea*. University of Hawai'i Press, Honolulu and Crawford House Press, Bathurst, New South Wales. xx + 507 pp.

Randall, J. E. and J. L. Earle. 2004. *Novaculoides*, a new genus for the Indo-Pacific labrid fish *Novaculichthys macrolepidotus*. *Aqua, J. Ichthyol. Aquatic Biol.*, 8: 37–43.

Randall, J. E. and P. Fourmanoir. 1998. *Terelabrus rubrovittatus*, a new genus and species of labrid fish from New Caledonia and New Guinea. *Bull. Mar. Sci.*, 62: 247–252.

Randall, J. E. and H. Ida. 2014. Three new species of sand lances (Perciformes: Ammodytidae) from the southwest Indian Ocean. *J. Ocean Sci. Found.*, 12: 1–11.

Randall, J. E., H. Ida, K. Kato and R. L. Pyle. 1997. Annotated checklist of the inshore fishes of the Ogasawara Islands. *Nat. Sci. Mus. Monogr.*, 11: 1–74, pls. 1–19.

Randall, J. E., K. Matsuura and A. Zama. 1978. A revision of the triggerfish genus *Xanthichthys*, with description of a new species. *Bull. Mar. Sci.*, 28: 678–706.

Randall, J. E. and H. A. Randall. 1960. Examples of mimicry and protective resemblance in tropical marine fishes. *Bull. Mar. Sci. Gulf Caribb.*, 10: 444–480.

Yasumoto, T., J. E. Randall, Y. Hashimoto, R. Bagnis and A. H. Banner. 1971. Toxicity of the surgeonfishes. *Bull. Jpn. Soc. Sci. Fish.*, 37: 724–734.

(井田 齊 Hitoshi Ida : 〒 252-0373 神奈川県相模原市南区北里1丁目15-1 北里大学海洋生命科学部 e-mail: palau.sakana@gmail.com)

魚類学雑誌 67(2):315–315
2020年11月5日発行

日本魚類学会史委員会からのお知らせ

会員通信「先達に聞く」インタビューと 原稿作成の指針について

会員の皆さまのご協力を得て、会員通信の「先達に聞く」は魚類学雑誌 49 巻 1 号 (2002 年) の第 1 話から始まり、これまでに 12 人の“先達”を紹介することがで

きました。これまでの“先達”紹介記事では、投稿のスタイルが統一されていなかったことで、収録時間や原稿量、収録音源媒体の文字起こし希望などに関する問合せが多くありました。“先達”へのインタビューは日本魚類学会史委員会が行うことが多かったのですが、会員による自主的なインタビューが行われる場合もありました。このような状況を踏まえ、インタビューの進め方や原稿作成のための指針を下記の通り策定いたしました。会員の皆さまには指針の内容をご理解いただき、「先達に聞く」の活動にご協力をお願いいたします。

インタビューと原稿作成の指針

- (1) インタビューを行う際には、事前に日本魚類学会史委員長に連絡し、承諾を得る。
- (2) インタビューは原則として 2 人以上の会員で行う。
- (3) 「先達に聞く」は原則として刷り上がり 6 頁程度とする。
- (4) インタビューは記録媒体で録音する。また、インタビュー内容の主要な部分はメモを残すように努める。
- (5) インタビューの収録時間は、文字起こし作業や印刷ページを考慮して 2 時間程度が望ましい。
- (6) インタビュアーがインタビュー内容の文字起こしを希望する場合は、その旨を日本魚類学会史委員長に連絡する。本委員会と幹事会が文字起こし業者を選定する。
- (7) メモや文字起こし内容に基づいてインタビュアーが原稿(案)を作成する。原稿の体裁などを日本魚類学会史委員会が確認した後にインタビュアーが原稿を投稿する。
- (8) 写真の掲載は、原則 1 点(冊子体印刷時はモノクロ)とする。
- (9) 「先達に聞く」の原稿冒頭にインタビュー対象者の専門分野や業績、学会への貢献(役職・活動歴など)を簡潔に紹介する [魚類学雑誌 64 巻 1 号 (pp. 82–86) および 64 巻 2 号 (pp. 225–230) を参照]。

なお、日本魚類学会史委員会への連絡・送付は、日本魚類学会のホームページの「マイページ」→「電子会員名簿」に進み、「会員情報検索」に表示される委員長(「委員会」の日本魚類学会史委員会を参照)のメールアドレスを使用してください。

(林 公義 Masayoshi Hayashi : 日本魚類学会史委員長 : 〒 239-0812 神奈川県横須賀市小原台 61-6 e-mail: totohayashi@muj.biglobe.ne.jp)